

GPT-5.6が変える知財実務の未来：ワークフロー統合の新時代

GPT-5.6は単なる技術革新ではなく、知財実務を「AIの試行」から「ワークフローへの完全統合」へと進化させる。3つの能力ティア (Sol/Terra/Luna) と長文脈処理により、ドラフティングや調査の劇的な高速化を実現する一方、法的責任は依然として「自然人 (人間)」に帰属する。

GPT-5.6の技術的特性とコスト構造



Sol
(フラッグシップ)

3ティア構成による用途別最適化:
最上位Sol、バランス型Terra、最速安価な
Lunaを業務内容で使い分ける。



Terra
(日常業務向け)



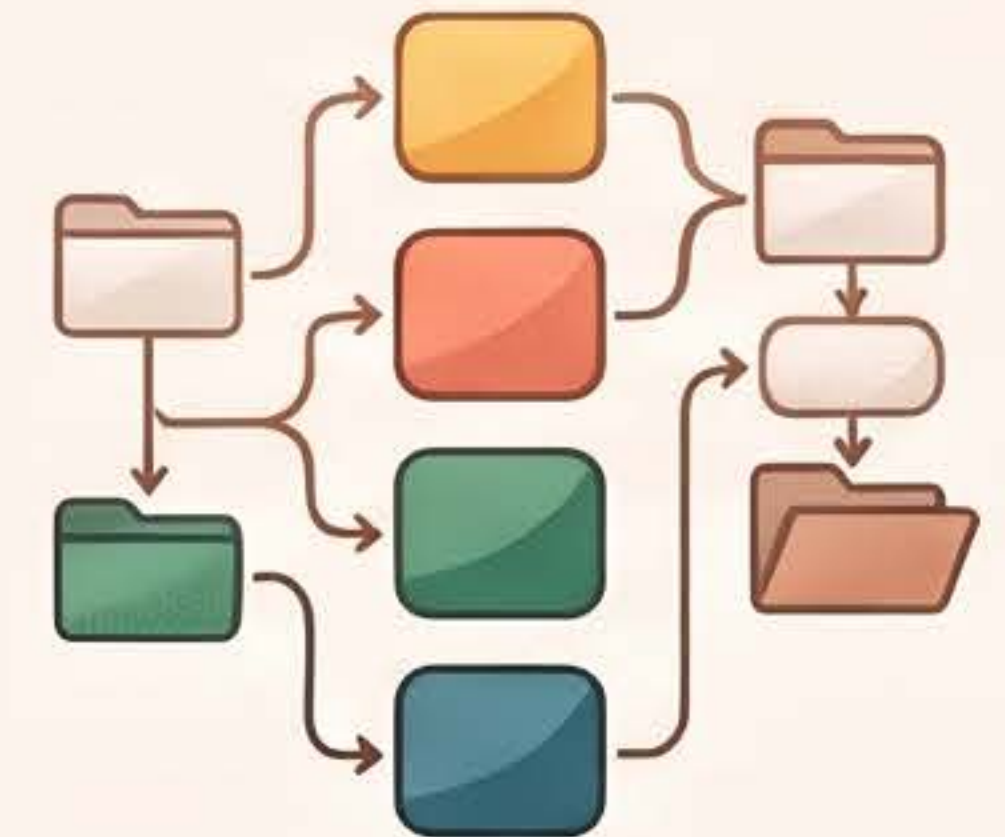
Luna
(最速・最安)

1,050,000

トークンの超長文脈処理



膨大な先行技術文献や明細書
膨大な先行技術文献や明細書を一度
に読み込み、一貫した分析が可能。



多段ワークフローの自動化:
エージェント機能により、調査からドラ
フト生成までの工程を連続的に実行。

実務へのインパクトと法的境界線



「叩き台生成」による
劇的な工数削減
明細書ドラフティングの心理的・時
間的ハードルをAIが大幅に下げる。



発明者は「自然人」に限定
日米欧の制度で確定。AIは
あくまで「ツール」として
定義される。



弁理士・実務家の
最終責任
ハルシネーションのリスクに備え、
人間による精査と確認義務が必須。



Sol

Terra

Luna

100万トークンあたりの利用コスト比較